國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕野中哲照著『那須与一の謎を解く』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平藤, 幸, Hirafuji, Sachi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000185

〔書評〕

野中哲照著『那須与一の謎を解く』

平藤　幸

虚実を越えて物語の「那須与一」を実在させるべく紡がれた、紛れもない研究書である。一般にも理解し易いように工夫されている。野中の対象に向かう姿勢と物事を明らめる方法は強い意志に貫かれ、師への思いが垣間見える。梶原正昭の『鹿の谷事件　平家物語鑑賞』『頼政挙兵　平家物語鑑賞』（武蔵野書院）は「鑑賞」の域を越えた注釈だが、その意義を野中は、多田蔵人行綱の心情の解説を例に挙げ、「ひとつの比喩を、表面的な解釈に終らせず、人物の心情や場面の状況に密着して解くという姿勢」に見る（「梶原先生の築かれた礎（いしずえ）」『古典遺産』四九）。梶原は、義仲・一谷・屋島・壇浦について続刊を予定していたというが、その遺志を継ぎ書かれたのが本書であると言える。

圧巻の全編を辿る。「読解編」の第一章は「扇の的の謎を解く」。要素の連繋が見えるのが「良い〈読み〉」で、二説に分かれる語義の判断も「〈読み〉と関わ」ると表明する。

第一節「鏑矢とは」、第二節「与一の背中にある矢」は、射扇の鏑矢や箙の矢数を検証し、ひと腰の矢二四本を節倹するのが「いくさの実相」と言う。第三節「波風、船の揺れの再現」は、風や波を読む鋭勘の与一の形象を浮き彫りする。第四節「逆接表現で示す逆境」、第五節「鏑矢を用いた理由」は、射扇時の北風を逆境の強調と読み、「那須与一」は「〈いくさ占い〉」の切実な物語であると断じる。第六節「「小兵」ゆえのハンディ」、第七節「矢は長いのか短いのか、弓は強いのか弱いのか」は、「小兵といふぢやう、十二束三伏」の「ぢやう」には逆接説もあるが、十二束は最短の部類であると闡明し、順接がよいとする。それを海に「一段ばかり」踏み入れる箇所に繋げ、小兵→腕が短い→矢が短い→弓の引き幅が狭い→弓の発射力が弱い→飛距離が短い→扇の的に接近する必要と連動すると言い、「小兵」の「強弓」は鍛錬された二の腕までイメージさせると言う。「良い〈読み〉」の達成である。第八節「「七段ばかり」は二〇メートルか七七メートルか」。一段を一一メートルとする説が優勢だが、西日本的な二・七メートル説から移行した説だと推

測する。第九節「義経が与一に〝鎌倉へ帰れ〟」と言うことの重み」。鎌倉を平家追討行軍の起点・坂東武士覚悟の原点とした、義経の「鎌倉へ帰れ」という叱責は、命賭けの覚悟を思い出させ、自信を喪失した与一を回生させる意味だと説く。

第二章は「物語の仕掛けを見破る」。本書が「那須与一」を通じた「物語論」であることが分かる。「人間は、物語の中に混乱（刺激）と秩序回復（安定）を求める」と言い切る。

第一節「扇の的現る」。平家・源氏の群れの非焦点化→義経・実基の焦点化→与一の大写しの刺激と不安の解消（V字型構想）が、読者を無意識に源氏方へ帰属させると説く。第二節「実基の謎解き」。実基推挙の与一の射扇辞退は義経の実基への信頼毀損で、義経の怒りが活きるべく、直前に義経・実基の問答が置かれたと見る。第三節「若武者を襲う訓練」。「褐に赤地の錦」の鎧直垂着用・「足白の太刀」佩刀は自尊心の象徴で、与一の阻喪との落差が印象付けられると読む。第四節「ゾーンに入った与一」。この場面のV字型構想は、「不定」（自信喪失の表明）→「一定」（交替願望）→「一定」（本来性の回復）で、巧みな対義語・同語混用の表現と言う。第五節「追い詰められての〈神頼み〉」。「沖には平家～」「陸には源氏～」は、平家と源氏の対峙ではなく、那須与一・とりまく人々の「〝中心と周縁〟」の構図で、与一の孤独な状況を表すと見る。祈願先の「那須の湯泉大明神」は、義経が持ち出した「鎌倉」と同様に、与一の故郷意識を呼び覚ますと言う。第六節「扇も射よげ」。〈神頼み〉の祈りが通じて風も弱まったという因果関係なら、武士与一の成功譚ではなく神の霊験譚だが、目を閉じ〈神頼み〉して目を見開く筋立ては、与一の集中力の神がかった領域への高まりを意味し、「射よげ」は、与一克己の瞬間の表現だと読む。「那須与一」の本質をそこに見るのであろう。野中ならではのぴたりと嵌まった解釈である。第七節「三つのV字型構想の小・中・大」。〈刺激と安定〉〈緊張と弛緩〉〈興奮と鎮静〉の観点から読み解いてこそ見える認知上の揺さぶりが、三度も仕組まれているとする。〈緊張と弛緩〉を感じるのは与一ではなく読者で、与一は読者にその快楽を与える物語の人形だと言う。第八節「「那須与一」のクライマックス」。『常山紀談』の佐野天徳寺了伯の平曲鑑賞の逸話の、〈神頼み〉がクライマックスで「扇も射よげに」の段階で緊張が緩み始める、その手前こそが味わい所だという了伯の見解に賛意を示し、「われわれの物語観」の問い直しを迫る。

第三章は「物語の表現構造を見抜く」。物語内の「見る」行為に読者は必ず加担させられ心理も誘導されると言い、V字型

構想・逆V字型構想は物語全体の枠組みと場面の仕掛けで、仕組まれた〈緊張と弛緩〉と視点・視界の問題は連動すると説く。

第一節「「那須与一」のリアリティ」。射扇が史実かは疑問だが、『平家』生成の時代には事実と認識されていたからこそ、作る側はリアリティに細心の注意を払う必要があったと言う。第二節「エンディングの聴覚・視覚の世界」、第三節「操られる時間」。〈神頼み〉の場面の無時間が射鏑矢で一気に流れ始め、空に舞う扇で時間の流れが緩まり日常の時間へと戻すと読む。音・視界・色彩・時間経過の全てが連動して、緊張から弛緩への流れを演出する構造を解明し、「那須与一」を例に、カメラが寄り緊張感がみなぎる〈場面〉から、カメラが引いて俯瞰的に対照を点描する〈展開〉を説明する。第四節「前半の趨勢表現」、第五節「装束描写の過去形と現在形」は表題を示すにとどめる。第六節「なぜ敵である平家までも与一を称賛したのか」は、平家の与一射扇称賛は「敵ながらあっぱれ」が一般的解釈だが、〈いくさ占い〉の概念とV字型構想から読み直す。与一の心理に同化して極度に緊張した読者の、解放されたい心を作者が汲み取り、平家に喝采させて緊張を弛緩させると言い、「北風」の「春風」への変化は祝福で、「寿祝性」と呼ぶ。この話は〈源氏神話〉で、平家の喝采を促しながら、平家滅亡・源氏勝利を見据えたと捉える。〈いくさ占い〉たるべき理由は、「那須与一」の表現と構造が連繋するからだというのが野中論の主眼であろう。「那須与一」が「一服の清涼剤」などと読まれがちな理由も逆照射される。読者に緊張を強いた作者がそれを解放させるサービス（外部論理）は、読者に理解されず、「晴れがましい舞台」という先入観故に、再読しても内部論理に肉薄する〈読み〉が不能だと言う。本書は、表現を細部にわたり徹底的に読み込み、浮かび上がる構造を分析し、正しい〈読み〉へと導く、「那須与一」を通した物語分析方法の解説書と言える。

「研究編」は、第四章「「那須与一」と『平家物語』のあやしげな関係を明かす」に始まる。屋島合戦譚の「那須与一」のありようの、再検証である。

第一節「屋島合戦譚における「那須与一」の独立性」は、後次的要素が濃い「那須与一」は『平家』に取り込まれ、前後章段との浸潤性・均質性が図られたが、人気章段であったがため、琵琶法師の繰り返しの語りによって再び独立性を強めたと見る。第二節「屋島合戦譚の後次性」。そもそも屋島合戦は無く、屋島合戦譚は、一谷合戦譚や壇浦合戦譚に比べて後次的に成長した部分であると説く。第三節「「七段ばかり」の決着」。「七段ばかり」は、「那須与一」の物語としてなら約二〇メートル、

巻一一「遠矢」と関連付けるなら約七七メートルだとし、鎌倉時代的な古い層（リアリティ）と南北朝時代的な新しい層（虚構化）に分けられると指摘する。第四節「「武者舞」の解読」。与一が武者舞を射る話は、語り手が創出し〈展開〉のために投入したと言い、「扇の的」と「武者舞」は、興と非情の対照ではなく、〈場面〉と〈展開〉（非場面）の違いだと言う。第五節「屋島合戦譚の流動展開と〈プラットフォーム〉論」。『平家』諸本間の大きな異同には、鎌倉中後期の事象「浮遊性の異同」と、南北朝期事象である後出本の「意図的な改変」があるとし、その峻別整理に〈プラットフォーム〉論と〈記事順序入れ替え〉論の両方を提示する。

第五章「「那須与一」が発するメッセージを突きとめる」。ここに言う〈物語の重層性〉論は、軍記の異本発生・重層化現象の説明である。

第一節「那須与一の非実在性」。那須与一宗隆（含兄弟）は続群書『那須系図』に後から組み込まれ、実在・非実在の確認不能に仕組まれているのは、「那須与一が伝承世界の、架空の人物だったから」と主唱する。第二節「那須与一のモデル那須光助」。那須与一を虚構の産物であると言い切り、与一のモデル「那須光助」から派生した伝承人物が巨大化して那須氏系譜に結び付けられ、実在性以上の大きな価値がこの物語に込められたと説く。第三節「那須光助が駆けた那須野」。『曾我物語』の狩りの記述と現地の地形から、当時の狩りの場選択や方法を説明し、那須氏の二大勢力（福原・金丸）の拠点を、地政学的観点から探る。第四節「「那須与一」に込められたメッセージ」。「那須与一」に、鎌倉から離れた辺縁性を表す「那須」の与一が八幡大菩薩等の神の加護で成功して、源氏が平家に勝利したというメッセージ、平家追討の業が相模・武蔵中心部の武士だけで達成されたわけではないというメッセージを読み取る。第五節「四部本の「那須与一」」。那須与一の物語は、その発生からすでに反体制的メッセージが込められていて、姿形を変えながらも『平家』後出本に脈々と受け継がれたと理解してよいとする。独自性豊かで興味をそそる見解である。第六節「「那須与一」の成立圏と〈綱引き〉論」。「那須与一」は鎌倉幕府批判の世論醸成の戦略的な物語で、反鎌倉・反体制のメッセージは、京都公家社会の発信だと言い、那須与一伝承の発祥地は鎌倉後期の伏見（即成院）である可能性が高いとも言う。第七節「後藤兵衛実基と〈怨親平等〉論」。覚一本の後藤兵衛実基像は、後藤内貞綱像と後藤範忠像とを合成した虚構、古き良き平和な時代の象徴で、屋島合戦譚の実基登場は〈怨親平等〉で全紛争に

ついて以前の姿を想起させる機能を負うと捉え、その〈怨親平等〉は、京都方内部の結束を呼びかける小さなもの（古態層）が先行し、京都方・鎌倉方の対立をも解消しようとする大きなもの（後出層）が覆いかぶさったものと見る。第八節「波状的な〈綱引き〉の痕跡」。反鎌倉（親京都）バイアスと親鎌倉バイアスの熾烈な〈綱引き〉が繰り広げられた結果、「那須与一」や屋島合戦譚は重層化したと説く。物語形成の主体が、反鎌倉側→親鎌倉側（体制側）→…と波状的に何度も移行したと言い、鎌倉側（体制側）が執拗に物語管理を継続した結果、反鎌倉側（反体制側）は体制側に丸め込まれたと言う。思い切った図式化に、野中の自信が透ける。第九節「史実と虚構の二元論を超えて」。史実・虚構の判定ではなく、虚構化のプロセスの「思い」の伝承の志向の究明が重要だとする。那須与一の物語には、坂東武士の底辺・末端者達が下から新時代を切り開いたのだというメッセージが込められ、社会の底辺にいると自認する人々の心を那須与一の物語が支えてきたと説く。南北朝後期に「事実」化したこの物語は、与一の伝承地や与一の末裔達が、歴史の「真実」伝承に与り、『平家』の那須与一に生命力を注ぎ込んできたと言う。

第六章「「那須与一」の形成過程を解き明かす」は「「那須与一」のパーツ論を越えて」と宣言する。

第一節は「那須与一の着想」。核である〈神頼み〉を抜きに、困難下の射扇譚と理解すると、形成過程で背負い続けた神話的エネルギーを見落とすと警める。第二節「「那須与一」にみえる住吉神鏑譚の痕跡」。〈神頼み〉をめぐり、最古の形は射扇に失敗したら入水する覚悟を述べたもの（四部本、第一段階）で、切腹の要素が入り（第二段階）、「龍」の表現が加わり（第三段階）、氏子の文脈が付加された（第四段階）と推測し、この物語は、住吉社から鳴鏑が西に飛んだ逸話を発生源として、『源氏物語』明石の海龍王伝承の類によって肉付けされたと捉え、現存諸本に存在する〈神頼み〉が「那須与一」の本質だと断じる。第三節「〈神頼み〉の背景としての二荒山神話、俵藤太伝承」。宇都宮氏の祖宗円は「石山寺座主」、宗円の孫頼綱は「日光山別当」であることから、琵琶湖と中禅寺湖が伝承世界で通底すると言い、琵琶湖畔園城寺の鐘の由来譚（『古事談』）と「那須与一」の共通項を骨格とした伝承が、住吉神鏑譚と結び付いて「那須与一」が着想されたのに違いないと説く。ただ、近年の歴史学では宇都宮氏の素性に疑義が呈されているので、野中の前提に再検証が必要である。第四節「扇の的の成立」。平家が扇で源氏を招く一節がある巻一〇「藤戸」が、「那須与一」の扇の的に影響を与えた可能性が高いと言う。第五節「「与一」

という名前の着想。『吾妻鏡』の屋島合戦に見え『平家』の屋島合戦譚に先住する「金子与一（近則）」から、坂東辺縁の地の一一男坊たる那須与一像が形成され、その与一像が「那須」の在地性をまとうのはモデル那須光助に拠り、光助の「那須」と金子与一の「与一」を合成すれば「那須与一」ができあがる（地理的辺縁性と兄弟中の末端性の融合）と説く。第六節「『今昔物語集』源頼光射狐譚の影響」。類話で神の加護の認識が通底する「春宮大進源頼光朝臣、狐を射ること」（『今昔物語集』）が、読み本系から語り本の祖本への形成過程で『平家』に摂取され、与一の辞退→受託の場面が作られたと言う。第七節「「那須与一」と『那須系図』と「鵠」」。『平家』巻四「鵠」の近衛帝仁平年間の化鳥射落としの主題は頼政像の正当化で、「那須与一」とは位相が異なるが、通底する部分もあるとし、同じ成立圏で成長したと言う。第八節「「那須与一」のオリジナリティ」。与一の心理に読者を同化させる戦略から仕組まれた三つのV字型構想こそが「那須与一」のオリジナルだと解読し、後藤兵衛実基の投入、那須光助と金子与一の合成、丸ぼやの家紋などの〈ふるさと意識〉が付与されたと見る。〈怨親平等〉性や末端・辺縁の武将の活躍というメッセージこそが、「那須与一」の心臓部で、先行するパーツの集合体としては説明不能と説く。第九節「『平家物語』の全体を窺う窓としての屋島合戦譚」。『平家』の重層的な形成過程を見抜くための用語・概念は、①〈綱引き〉論、②〈怨親平等〉論、③〈プラットフォーム〉論、④〈小捨大取〉論だと言い、「那須与一」や「屋島合戦譚」の、『平家』の流動と展開を窺う窓たる側面を論じる。

「おわりに」で、領域や縄張りの不毛、教育と研究の区別の無意味、学問の大事を説く。

初期から後期までの軍記を広く見渡してきた野中の、「那須与一」をめぐる本文の〈読み〉はつまるところ、そう読むべきであるという揺るぎない確信の説明である。そう読むことが可能だという意味以上に、そう読むのが必然だという意味で解釈が提示されているということである。V字型構想、〈場面〉と〈展開〉、指向性、〈綱引き〉論、〈怨親平等〉論、〈プラットフォーム〉論、〈小捨大取〉論等の用語・概念を鍵として、説が分かれる問題に截然として解を断じ、見過ごされてきた問題を浮き上がらせて解を示す。本書で示された「那須与一」をめぐる解釈を新たな起点として、さらに読みが深まっていくことを期待したい。

（A5判、三二二頁、武蔵野書院、二〇二二年五月発行、定価二〇〇〇円＋税）